

「～がする」構文に入る名詞について

傅 夢菊

キーワード：「がする」構文、複合名詞、動作性名詞、意味分類

要 旨

本稿は日本語の「～がする」構文に入る名詞について検討している。「する」には非常に多様な使い方があり、従来の研究においては「～をする」に関するものが多く、「がする」を対象にする研究は非常に少ない。本稿は BCCWJ を利用して「～がする」構文に入る名詞を調べた上、これらの名詞の構造的・意味的な特徴について考察を行い、基準を立てて分類を試みた。このような分類を基に、今後は「～がする」構文について検討することで、「する」研究の重要な一環を成すことに寄与したいと考える。

1. はじめに

- (1) もっとも、店の方は仕入れなどの税負担分を理由に若干の値上げをするかもしれない¹。
- (2) 月が見えるくらいだから、当然、雨漏りがする。
- (3) 夕食後に勉強をすると「頭がもやもやして考えられない」と言います。
- (4) なんともいえないいやな予感がする。
- (5) どうせ花見をするなら花見酒を売ろうじゃないか。
- (6) たしかに、いわゆる“人好きがする”というタイプじゃない。

例文(1)～(6)で示すように、日本語の動詞「する」はガ格名詞ともヲ格名詞とも結びつくことができ、「～がする」「～をする」に入る名詞は様々である。本稿は「名詞

¹本稿で使った例文は特に断りのない場合、全て BCCWJ から抽出したものである。

＋が／をする」のような結合を「～が／をする」構文と呼ぶことにする。先行研究では特に「～をする」構文に関して様々な面から考察されているが²、「～がする」構文についての研究は管見の限り多くない。本稿はコーパスを利用して「～がする」構文に入る名詞を調べ、その特徴の分析や意味分類を行う。

研究方法として、まず「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の中納言版（以下ではBCCWJと称す）を利用して、「～がする」構文に入る名詞を調べる。そして、語構成や意味素性などによって分類を行い、「～がする」構文に入る名詞の状況を把握する。

以下第2節では先行研究について概観し、第3節は「～がする」構文に入る名詞を集めて大まかな状況について紹介する。第4節はその中の複合名詞について分析を行う。第5節は意味によって分類を試み、第6節では全体のまとめを行う。

2. 先行研究

従来、「する」についての研究は数多くあるが、「をする」を中心にするものが多く、「がする」については村木（1991）と影山（1993）が直接接触している。

村木（1991）は「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能を果たす動詞（村木 1991：203）」を「機能動詞」と呼び、「する」は典型的な機能動詞としている。名詞と機能動詞の結びつきは機能動詞結合と呼ばれ、いくつかのタイプがあり、本稿の「～がする」構文はその一つである。

(7) 主格の名詞 + 機能動詞

だれかが唾液を呑む音がした。

そのとき彼が誰かに見られている感じがして振り向いた。

稲光／夕焼け／におい／響き／声／味……がする

感じ／気疲れ／胸騒ぎ／息切れ／耳鳴り……がする

（村木 1991：205、一部変更あり）

村木（1991）は機能動詞について多くの面から考察を行い、機能動詞結合の性質や特徴を明らかにした。機能動詞結合に現れる名詞は「典型的には行為をあらわす名詞」

² 「～をする」に関する先行研究には Miyagawa(1989)、Uchida & Nakayama(1993)、平尾（1990）、小林（2004）などが挙げられる。

（「動作名詞³」）であるが、「その周辺に状態名詞⁴や現象名詞⁵」があると指摘されている。(7)であげられている「稲光、夕焼け」などは自然現象、「味、音」などは感覚表現以外、生理現象と病理現象を表すものもある。つまり、「～がする」構文に入るのはほとんど村木（1991）の言う現象名詞だと考えて良いだろう。村木（1991）は機能動詞結合全体を対象にしており、「～がする」について言及する部分はあるが、かなり簡単に触れただけである。本稿は村木（1991）から示唆を得て、より詳しい調査・考察を試みたい。

影山（1993）は「VN（動作性名詞）＋する」の迂言的構文においてVNが認可される方法として、「ヲ格による標示と副助詞による標示」以外、「が」を伴う構文もその一つであると指摘している。

- (8) a. 雨漏り、地鳴り、海鳴り、地響き、底冷え、稲光、物音、(雷の)遠鳴り、しろうと受け、見劣り、目移り、水漏れ、見栄え
cf. *地震／かみなり／音声／雨降りがする
- b. 予感、胸騒ぎ、息切れ、耳鳴り、胸焼け、気疲れ、気乗り、めまい、吐き気、頭痛、心変わり
cf. *喘息／発作／鼻血／寝不足／嫌気／むかつきがする

（影山 1993 : 285）

影山（1993）によると、「～がする」構文は典型的に自然現象(8a)と生理現象(8b)に見られるという。「～がある」「～の最中に」「たくさんの」との共起状況について検

³ 動作性名詞、あるいは動名詞について、研究者によってその呼び方や認定に関して必ずしも一致しているとは限らない。従来、動名詞は「する」と直接結びつくことのできる名詞とされており、小林（2004）、久保田（2014）、由本（2017）、杉岡（2018）などはこの考え方を取っている。一方、影山（1993）はVNを認定する方法に、「～する」だけでなく、「～をする」と「～がする」などのヲ／ガ格表示もその一つだと指摘している。村木（1991）の言う動作名詞は「何らかの動的な運動が名づけられている名詞」のことであり、サ変動詞の語幹以外、動詞の連用形も含まれている。例えば、「決定をくだす」、「影響をあたえる」や「さそいをかける」「ぬすみをはたらく」など（村木 1991 : 214、下線部は筆者より、以下同）。

⁴ 村木（1991 : 215）によれば、状態名詞は「平和をたもつ、不振におちいる」「最高潮に達する」などのような「静的な状態を名づけた名詞」である。

⁵ いわゆる現象を指す名詞であり、「こおりがはる」「けむりがたつ」のような自然現象や「においがする」「味がする」などの感覚表現、「まばたきをする」「あせをかく」などの生理現象及び「めまいがする」「せきをする」のような広い意味での病理現象が含まれている（村木 1991 : 215）。

討した上、「～がする」構文に入る名詞は複雑事象名詞⁶だと影山（1993）は指摘している。

影山（1993）は動作性名詞 VN の格標示と認定方法を検討する時に、「～がする」構文に触れるため、取り扱うのはごく一部の名詞であり、ほとんど複合名詞である。実際調べたところ、「～がする」構文に入る名詞は(8)で挙げられているいわゆる典型的な複雑事象名詞以外、(9b)のような単純事象名詞の性質を持っているものもあることがわかった。

- (9) a. 複雑事象名詞：感触、めまい、嘔吐、直感、予感、見栄え、持ち重り、雨漏り、水漏れ、色落ち、息切れ、立ちくらみなど
- b. 単純事象名詞：酸味、味、音、声、匂い、香りなど⁷

語形成の面でみれば、「音、声」のような単純語もあれば、「雨漏り、耳鳴り」などの複合名詞もある。影山（1993）は「～がする」構文に生じる名詞の性質について少し考察したが、検討の中心は複雑事象名詞にあるため、他の名詞については触れていない。

以上みたように、村木（1991）と影山（1993）は「～がする」構文について触れたが、前者は機能動詞の全面的な研究に着目し、「～がする」に関してはごく簡単に紹介した。後者は動名詞の認定方法として「～がする」構文を提示しているが、一部の

⁶ 影山（1993）は Grimshaw(1990)を参考にしてている。Grimshaw(1990)は事象を表す名詞を複雑事象名詞（complex event nominal）と単純事象名詞（simple event nominal）に分け、前者は項構造を持ち、動詞と並行的なアスペクト性質を持ち、後者は項構造を持たないと指摘している。結果名詞は具体的な対象を指す名詞である。

⁷ 複雑事象名詞、単純事象名詞、結果名詞という分類は名詞固定の性質によるのではなく、文脈における役割や特徴などに関わっている。そのため、同じ名詞は複数の語彙エントリーに記載されることも可能である。

- (i) 日本語の研究をする。（複雑事象名詞）
彼の研究は非常に難しい。（結果名詞）
- (ii) お酒の味は好きではない。（結果名詞）
このお菓子にはお酒の味がある。（単純事象名詞）

（全て作例）

「匂い、味」などは単純事象名詞であると同時に、結果名詞として使われることが可能である。(ii)の示すように、「味」は具体的なものを指すこともできれば、「～がある」構文に入ることもでき、この場合は具体的なものでなく、事象を指しているため、単純事象名詞だと思われる。

事象名詞（複雑事象名詞）だけ触れて、単純事象名詞については触れなかった。本稿は「～がする」構文を中心に、BCCWJを利用して、「～がする」構文に入る名詞を調べて考察を試みる。

3. 「～がする」構文に入る名詞

BCCWJで調べた結果、「～がする」構文に入る名詞は以下のようなものがある。

- (10) 物音、音、声、発射音、足音、悲鳴、叫び声、響き、香り（薫り）、匂い（臭い）、異臭、悪臭、酸臭、雨漏り、稲光、雷鳴、水漏れ、めまい、悪寒、息切れ、鈍痛、胃もたれ、立ちくらみ、咳、耳鳴り、底冷え、気疲れ、直感、気、感じ、思い、気持ち、予感、値段、兆し……

形式の面で言えば、「音、声、咳」のような単純語もあるが、「雨漏り、息切れ、気疲れ」のような複合語がより多く見られる。また、語種でみれば、漢語の例として「悲鳴」、「雷鳴」、「予感」が、和語の例として「匂い」、「香り」、「雨漏り」が、外来語の例として「イメージ」がある。一方、動作性について考えれば、これらの動詞は純粋名詞（「-V」）と動作性名詞（「+V」）に分けることができる。この節においては形式面（単純語 vs. 複合語）と意味面（「±V」）から「～がする」構文に入る名詞を概観する。

単純語とは「単一の形態素のみで成る語（影山 1993 : 13）」であり、「形態素として二つ以上の語基（基本的な素材概念を表す最小形式）を含む単語（『日本語学キーワード事典』：360）」は複合語と呼ばれている。「気、味、音、声、香り、匂い、思い」などの単純語に比べて、複合語の数が圧倒的に多く、「～音／声／味／臭」の形のもの（e.g. 「発信音、叫び声、酸味、体臭」）や右側に動詞連用形が現れるもの（e.g. 「雨漏り、気落ち、耳鳴り」）などがある。

(11) 【単純語】

漢語サ変動詞語幹：感触、直感、予感、感覚、意識、実感など⁸

⁸ 「予感」「実感」などは「予+感（予め感じる）」「実+感（実に感じる）」のような解釈で、複合語と分けることもできるが、現代日本語において、「予感」「実感」は二字漢語サ変動詞としてすでに定着しており、複合語から単純語へと移行したと思われるため、単純語に分類した。

和語動詞連用形：香り、匂い、響き、嘶き、感じ、思い、兆し、騒めきなど

その他：味、音、声、気など

【複合語】

右側名詞型：発射音、爆発音、叫び声、話し声、笑い声、鳴き声、呻き声、作動音、破裂音、大音響、ネタ臭、冷凍臭、異臭、悪臭、酸臭、銅臭、口臭、死臭、腐臭、体臭、腐敗臭、酸味、吐き気、憑き物など

右側動詞型：見栄え、雨漏り、水漏れ、色落ち、息切れ、耳鳴り、身震い、胸騒ぎ、気疲れ、拍子抜け、気後れ、見劣り、胃もたれ、日持ち、目移り、手触り、舌触り、心持ち、肩こり、気持ち、長続き、持ち重り、立ち眩み、見劣り、張り合い抜け、見飽きなど

(11) で示すように、複合語の中で、「右側名詞型」には人間の五感、特に味覚・聴覚・臭覚を表すものがほとんどである。一方、「右側動詞型」には人間の生理・病理・心理状況を表すもの以外、「長続き、持ち重り」など状態や性質を表すもの、「雨漏り」「水漏れ」のような自然現象を表すものもある。

次は動作性についてみる。名詞の中には「学生、パソコン」のような動詞性を持たない（「-V」）典型的な名詞から、「運動、練習」のように動作・行為を表し、動詞性（「+V」）を持つ名詞がある。前者は先行研究において「純粋名詞」「モノ名詞」などと呼ばれ、後者は「動作性名詞」「動名詞」「事象名詞」などと呼ばれている。本稿は「純粋名詞」と「動作性名詞」（VN）という言い方を取る。

「動作性名詞」には動詞性も名詞性もあり、「純粋名詞」と比べてより複雑な振る舞いをみせている。影山（1993）によれば、動名詞 VN は「する」を伴って動詞化する表現であり、いわゆる「形態論的な基準を第一に添えている」という。一方、意味的な面からみれば、動名詞以外の名詞でも動作や出来事を表すことのできるものがあり、これに基づいて、影山（1993）は名詞を「結果名詞」と「事象名詞」に分け、後者をさらに「単純事象名詞」と「複雑事象名詞」に分けている。単純事象名詞はどちらかと言えば名詞的であるが、複雑事象名詞は動詞性が高い。一部の複雑事象名詞は「～する」形が形成できないが、典型的な動名詞と似ている振る舞いをみせているため、VN を認可する方法として、「～をする」以外、「～がする」構文もあると影山（1993）が提案している。

本稿は由本（2017）などを踏まえ、形態論的な基準で動名詞を認定する。つまり、

「～する」形のできる名詞を動名詞として認め、できない名詞を純粹名詞と呼ぶ。影山（1993）の提案は動名詞をより多角的な視点で考察できるが、形態論的な基準で認定することでより明瞭な分類が可能となるため、本稿はこのような認定方法を採用する。「～がする」構文に現れる名詞を動作性の面で分けると、以下の表1になる。

表1 「～がする」に入る名詞⁹

動作性名詞	めまい（眩暈）、嘔吐、直感、予感、感覚、意識、イメージ、実感、錯覚、見栄え、持ち重り、雨漏り、水漏れ、色落ち、息切れ、立ちくらみ、底冷え、胸焼け、武者震い、身震い、胸騒ぎ、気疲れ、拍子抜け、気後れ、気落ち、心変わり、張り合い抜け、使い減り、長続き、人だかり、見劣り、日持ち、目移り、先細り、人間離れ、位負け
純粹名詞	味、風味、酸味、音、声、「～声」（人声、奇声、叫び声など）、「～音」（足音、水音、靴音など）、「～臭」（異臭、悪臭、酸臭など）、悲鳴、響き、怒鳴、怒号、嘶き、香り、匂い、頭痛、悪寒、鈍痛、咳、尿意、激痛、微熱、工合、痛、動悸、気、感じ、思い、印象、腹痛、気配、気分、心地、雷鳴、値段、値、兆し、氣勢、ざわめき、雰囲気、地響き、大音響、手触り、舌触り、寒気、吐き気、頭痛み、胃もたれ、耳鳴り、気持ち、心持ち、肩こり、稲光、山鳴り、地崩れ、人群れ、人好き、見飽き、憑き物

表1からみると、動作性名詞の中に、漢語名詞とN-V型複合名詞がほとんどであり、意味でみれば人間の心理的あるいは生理的な事象に関するものが最も多い。他に「雨漏り、水漏れ」など自然現象を表すもの、「先細り、長続き、位負け」など『語彙分類表』において「関係、作用」に分類されるものもある。純粹名詞には五感（味覚、嗅覚、聴覚）が最も多く、その他、人間の生理や心理状況を表すものもある。

4. 「～がする」構文に入る複合名詞

この節では「～がする」構文に入る複合名詞を取り出して考察する。第3節でみたように、「～がする」と共起する複合名詞には主として「右側名詞型」と「右側動詞型」があり、まずは複合名詞に関する先行研究についてみる。

⁹ 「～する」と直接結びつくことができるかどうかは主として『大辞林』によって判断する。「耳鳴り、雷鳴、気配、印象+する」の用例はコーパスで少しあるが、辞書によればサ変動詞ではないため、動作性名詞でないとみなしている。一方、「張り合い抜け、感触、胸騒ぎ+する」の用例はコーパスでほとんどないが、辞書によって動作性名詞と認定した。

4.1 先行研究

右側名詞型の複合名詞に関して、奥津（1975）は NN 型、Adv N 型、AN 型、VN 型と V-Aux N 型の五つのタイプについてその変形規則を分析した。簡単にまとめると次のようになる。

- (12) 【NN 型】 N (C) V Tense N → N N e.g. 春ニ 吹ク 風 → 春 風
【Adv N 型】 Adv (P) V Tense N → Adv N e.g. キラキラト 光ル 星 → キラキラ星
【VN 型】 V1…Vn Tense N ⇔ V1…Vn N (n≥1) e.g. 枯レタ 草 → 枯レ草
【AN 型】 e.g. 白イ ウサギ → 白ウサギ
オテンバ ナ 娘 → オテンバ娘
【V-Aux N 型】 e.g. (何カラ) 思ワセル 振り → 思ワセ振り
(奥津 1975 : 24-28、一部変更あり)

AN 型と V-Aux N 型も基本的に時制詞の消去によるものなので、奥津（1975）は VN 型とまとめてその変形規則を整理している。

動詞由来複合名詞について、代表的な研究として伊藤・杉岡（2002）、由本（2015a, 2015b, 2017）などが挙げられる。伊藤・杉岡（2002）は内項を複合する複合語（「内項-V」で表示する）及び付加詞を複合した複合語（「付加詞-V」で表示する）について分析を行い、両者の間に音韻・意味及び生産性に違いがみられ、異なるレベルで形成されたと指摘している。

- (13) 「内項-V」複合語
行為（金魚すくい）、現象（地滑り）、動作主（相撲とり）、道具（ねじ回し）、特徴（金持ち）、場所（車寄せ）、時間（夕暮れ）

「内項-V」複合語はほとんど「-V」であり、「～する」の形を取ることができず、基本的には「動作の名づけ」であるが、「意味拡張によって『場所』などの意味を持つことができる」と伊藤・杉岡（2002）が指摘している。

- (14) 「付加詞-V」複合語
道具（ワープロ書き）、様態（一人歩き）、原因（船酔い）、結果状態（黒こ

げ)、材料 (石造り)

動作：肌が日焼けする、街をそぞろ歩きする、切手をのり付けする

状態：魚が黒こげだ、服がずぶ濡れだ、レンガ作りの倉庫

(伊藤・杉岡 2002 : 115、変更あり)

(14)で示すように、「付加詞-V」複合語の中には、「+V」の性質を持ち、「～する」形で述語として働く動作性名詞と「-V」で「だ／の」を伴って状態述語になるものがある。複合語に動作性があるかどうかは付加詞の種類に関わり、付加詞を含む複合語は「動詞の LCS の中の下位事象の種類 (ACT/BECOME/BE) が、複合語全体の性質を決定する (伊藤・杉岡 2002 : 122)」と指摘されている。

由本 (2015a) は伊藤・杉岡 (2002) を踏まえ、「N+V」型複合語を四つのタイプに分け、それぞれ形成の動機付けについて考察を行った。

- ① V の付加詞が結合したタイプ：このタイプの複合名詞は動詞の概念構造 (LCS) を基盤とし、もとの V が表す動詞概念を修飾要素の付加により特定化するという動機によって形成される (e.g. 水洗い、日焼け、一人歩き)。
- ② V の内項が結合し結合価が減じられるタイプ：もとの動詞が表す意味を受け継ぎながら、その表す事象の中で、もとの動詞とは異なる視点を与える目的で形成されている (e.g. 棚上げ、味付け、親離れ)。
- ③ 行為を表す N が結合したタイプ：N は身体部分名詞が多く、比喩的意味拡張を起こし、身体部分に関わる行為を表している。N が表す行為を V の意味と合成して複雑述語を作る (e.g. 口出し、顔出し、肩入れ)。
- ④ 動詞の結合価を減じることのないタイプ：複合語に含まれる N と複合語のとの項とは「部分—全体」の関係を形成し、V が表す行為を直接対象 N のみならず、それが構成するモノ全体に影響を及ぼすモノとして捉え直すことが形成の目的である (e.g. 値上げ、気疲れ、目移り)。

由本 (2016) は日本語の複合名詞の意味解釈について、先行研究にみられる「修飾関係」「叙述関係」に加え、新たな観点でそのメカニズムを整理している。つまり、「LCS と項構造を基盤としながらも文脈に従って合成された意味を世界知識に照らし再解釈し、柔軟に指示対象をシフトする (由本 2016 : 88)」メカニズムも存在すると指摘されている。これは特に「絵描き、ねじ回し」などの具体物を表す複合名詞の

指示対象を説明するのに重要である。

4.2 「～がする」構文に入る複合名詞

複合名詞は用法・統語的な性質により、「～する」と直接結合して動詞として使われる「動作性名詞」と、ヒトやモノなどの具体物を表す「純粋名詞」、「だ」と結合して述語として用いられる「述語名詞」という三つに分けられる。本稿は「～がする」に入る複合名詞について考察し、先行研究を踏まえながら、「動作性名詞」と「純粋名詞」に分けて分析を試みる¹⁰。

4.2.1 純粋名詞

表 1 をみると、「～がする」構文に入る「-V」素性の複合名詞には以下のようなタイプがある。

(15) 右側名詞型

歌声、人声、発射音、発信音、爆発音、射撃音、作動音、破裂音、大音響、
ネタ臭、冷凍臭、刺激臭、腐敗臭、異臭、悪臭、話し声、笑い声、鳴き声、
叫び声、うめき声、捻り音、吐き気、憑き物

この中では NN 型、AN 型と VN 型がほとんどである。奥津 (1975) を参考にする
と、次のような分析ができる。

(16) NN 型: [[人が声を発する] S [声] N] NP → 人が発する声 → 人声

AN 型: [[音響が大きい] S [音響] N] NP 大きい音響 → 大音響

VN 型: 憑いているもの → 憑き物 (自動詞+主語)

(何かを) 話す時の声 → 話し声 (他動詞+同格連体名詞)

爆発する時の音 → 爆発音 (自動詞+同格連体名詞)

S は連体修飾文を指し、この場合、被修飾名詞である N と同一の名詞が連体修飾文 S の中にもあるということで、「同一名詞連体修飾」と奥津 (1975) が名付けている。「人声」がその例である。一方、次の(17)の示すように、被修飾名詞を連体修飾文に

¹⁰ 由本 (2017) のいう「述語名詞」は「～だ／の」と伴って述語になる名詞であり、「～する」と関係が希薄であるため、ここでは述語名詞に関して検討しない。

置く事ができない場合、「付加名詞連体修飾」と呼ばれ、さらに「相対名詞」と「同格連体名詞」を被修飾名詞とする場合がある。

- (17) [[朝メシヲ 食ウ] S [前] N] NP → 朝メシ 前（相対名詞による連体修飾）
[[雨ガ 降ル] S [模様] N] NP → 雨 模様（同格連体名詞による連体修飾）

（奥津 1975 : 24、一部変更あり）

「憑き物、話し声、爆発音」などは「動詞につく時制詞の消去によって」形成されていると考えられる。「爆発音、射撃音」などは一見「NN 型」のようにみえるが、「射撃、爆発」などはサ変動詞語幹であり、その意味解釈をみると、VN 型に分けるほうがより適切であり、「ある動作・行為に伴う声／音／匂い」を表すものが多い。ここでの「ある動作・行為」は漢語サ変動名詞（「発射、射撃、冷凍」など）や動詞連用形（「笑い、鳴き、叫び、うめき、捻り」など）で表す。「歌声」は一見「名詞一名詞」のようにみえるが、ここでの「歌」は「歌う」と理解したのが複合語の意味に近いので、V-N型だと考えられる。

(18) 右側動詞型

手触り、舌触り、頭痛み、胃もたれ、耳鳴り、肩こり、気持ち、心持ち、稲光、山鳴り、地崩れ、人群れ、人好き、見飽き……

「手触り、舌触り」は「付加詞（道具）—動詞」である。伊藤・杉岡（2002）によれば、「水洗い、雑巾拭き」などは「道具—ACT ON y」という意味構造であり、「ある手段で／ある状態で～する」の意味を持っている。一方、ここでの「手触り、舌触り」も「道具—動詞」の構造であるが、動作・行為ではなく、対象の属性・状態を表す。

「手触り、舌触り」以外、このグループの複合名詞は全て「内項—動詞」の構造である。伊藤・杉岡（2002）が指摘するように、内項を含む複合語の多くは「-V」という品詞素性を持つ名詞である。ここでの「頭痛み、胃もたれ、耳鳴り、肩こり、気持ち、心持ち」は人間の生理・心理的な現象を表す名詞であり、N と複合語の主語との間に「部分—全体」の関係がみられる。

「見飽き」は動詞連用形の結びつきであるが、複合した後は「-V」素性を持つ純粹名詞となる。意味としては「見て飽きる」という解釈が可能であり、前後関係が読み取れ、右側の「飽きる」は複合語全体の意味に貢献度が高い。

4.2.2 動作性名詞

「～がする」構文に入る動作性名詞は全て右側動詞型であり、主として以下の三つのタイプがある。

(19) N—V型

雨漏り、水漏れ、色落ち、地響き、息切れ、底冷え、咳払い¹¹、武者震い、身震い、胸騒ぎ、気疲れ、拍子抜け、気後れ、気落ち、心変わり、人だかり、張り合い抜け、日持ち、目移り、先細り、人間離れ、位負け

このタイプには「内項—動詞」という構造を持つものが多く、「雨漏り、水漏れ、色落ち」などは自然現象を表し、「息切れ、身震い」は人間の生理現象を表す。「胸騒ぎ、気疲れ、拍子抜け、気後れ、気落ち、心変わり、目移り」などは人間の心理的状態を表す。「人だかり」は「多くの人が集まっていること」を意味し、「人が集まる」という動作の結果、「人だかり」という現象が現れると考えられる。「先細り」は「先の部分は元と比べて細い。先に行けば行くほど細くなる」という基本的な意味から、「時がたつにつれて勢いが衰えること」を表すように、物事の発展傾向を描写する。

「底冷え、人間離れ」は「底から寒い感じがする」「(普通の人間)から離れている(才能など)」のように、「起点格—動詞」という読みができる。「日持ち」は「時間表現+が+持つ」の「ある状態が維持される (e.g. 20年は持つ材料)」意味からできたと考えられる。「位負け」には二つの意味があり、一つは「相手の地位・品位に負ける」、もう一つは「実力は地位・評価に負ける」である。上の「内項—動詞」のものはほとんどある現象を表すのに対して、「底冷え、人間離れ、日持ち、位負け」などは人やものの状態・属性を表している。

¹¹ 「咳払い」は「わざとせきをする」意味で動作を表す時は「咳払い(を)する」で使われる。「咳払いがする」は動作を表さず、「咳払いをする時の音がする」を意味している。

- (iii) その夜、李がやって来たが、二言三言話したかと思うと、窓のそとで咳払いがしたので、そそくさと立ち去った。

(20) V1—V2 型

見栄え、見劣り、持ち重り、使い減り、立ちくらみ

この五つの語はいずれも「動詞連用形—動詞連用形」の構造であり、複合語の意味には右側の V の貢献度が高い。「見栄え、見劣り」の「見る」はあくまで手段であり、中心的な意味は「栄える、劣る」である。「持ち重り、使い減り」において、「持つ、使う」よりも「重る、減る」の意味が複合語の意味に近い。「立ちくらみ」は「急に立ち上がって目眩がする」という意味であり、「立つ」という動作をしてから「眩む」という感じが生じるため、「立つ」はある程度複合語においても重要だが、中心的な意味を貢献するのは「眩む」だといってよい。

このように、これらの複合語において V1 は、手段・方法・経過などを表し、その意味が非常に希薄になっている一方、V2 は複合語の中心になっていると考えられる。このタイプの複合語として、「立ちくらみ」は人間の生理的現象を表すが、他のものは全てものの性質を表している。また、「副詞—動詞」の構造であるが、「～する」と共起してもものの性質を表すものに「長続き」がある。

5. 意味による四分類

第 3 節と第 4 節において「～がする」構文に入る名詞の構造的な特徴について分析をした。この節ではこれらの名詞を意味の面から分類する。第 3 節からわかるように、「～がする」構文は多くの名詞と共起できるが、文法的などの面において必ずしも同じではない。そのため、意味の面から分類することも必要だと思われる。

- (21) a. この部屋はいつも {雨漏りがする／雨漏りがしている}。
 b. この部屋は今 {*雨漏りがする／雨漏りがしている}。
 (22) a. この部屋はいつも変な {匂いがする／匂いがしている}。
 b. この部屋は今変な {匂いがする／匂いがしている}。
 (23) a. 私は最近よく {頭痛がする／頭痛がしている}。
 b. 私は今 {頭痛がする／頭痛がしている}。

(全て作例)

例文(21)～(23)が示すように、「雨漏りがする」「匂いがする」「頭痛がする」は主語

や「スル・テイル」形の時制意味などにおいて違う振る舞いを見せている。これらの語結合において、「する」は文法的な機能を果たしているが、語結合全体のアスペクト的性質などは名詞の語彙的情報にも強く関わっていると考えられる。そのため、これらの名詞と「～がする」構文との共起を検討する際、まず語彙の意味によって分類するのは重要だと思われる。

また、情報の共有しやすさの面からみると、「雨漏り、稲光」などは視覚的にわかりやすいため、最も共有しやすいと思われる。「匂い」や「音」などについて、人によってその感知能力が違うので、「雨漏り」などに比べて共有しやすさが少し低い。「予感、寒気、吐き気」などは人間の内的な感情・感覚を表し、一般的に、経験者以外の人には感じ取ることができず、最も共有しにくいと考えられる。感覚・感情的な表現にモダリティ表現が必要となるのもそれと関わっている。

以下ではいくつか基準を立てて「～がする」構文に入る名詞の分類を試みる。

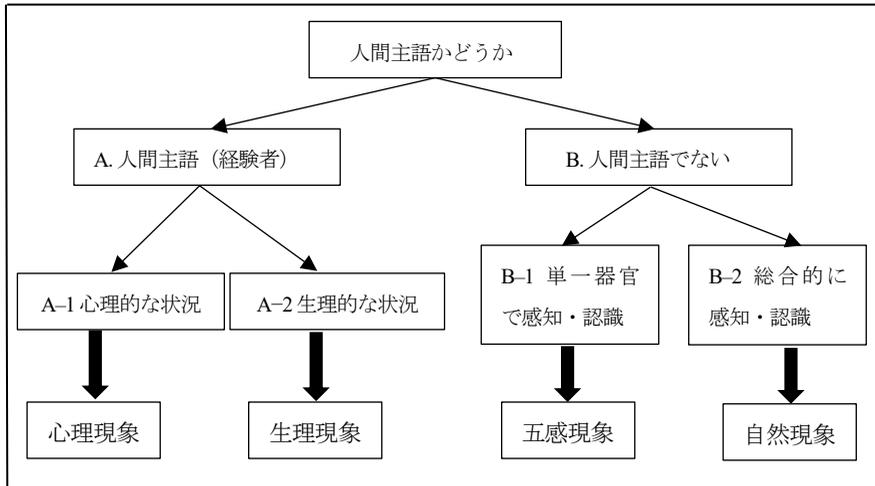


図1 「～がする」構文に入る名詞の分類基準

A. 主語は人間である

第3節でみたように、「～がする」構文に入る名詞には動作を表すものがほとんどなく、基本的には何かの状況や現象を描写していることが確認できる。その中に、人間を主語とするものとそうでないものがあり、基本的に「私は～がする (している)」に自然に入れるものは「人間主語」と認める。そうすると、「雨漏り、水漏れ、音、

味」などが入れないため、Bのタイプに入る。

- (24) a. 私は {奇妙な予感／妙な胸騒ぎ／ひどい頭痛／寒気} がする。
b. 私は {*大きな音／?嫌な匂い¹²／*ひどい雨漏り} がする。 (作例)

(24a)のような名詞は人間を主語に取り、人間の生理的や心理的などの状況を描写することができ、「ひどい～がしたので、病院に行った」という文に入れるかどうかで生理表現と心理表現を分ける。

- (25) a. (私は) ひどい {頭痛／吐き気／目眩／胃もたれ／息切れ……} がしたので、病院に行った。
b. (私は) ひどい {*予感／*錯覚／*気持ち／??拍子抜け／??気疲れ……} がしたので、病院に行った。 (作例)

(25a)の「頭痛、吐き気、目眩」などは人間の身体的な状況を表すことから、生理現象と呼ぶことにする。身体的な状況がある程度ひどくなると、病気だと思われることが多いので、「病院に行く」と共起できる。一方、(25b)の「予感、錯覚、気持ち」などはもっぱら人間の心理状況を表し、普通には「病院に行く」と関連づけにくい。ただ、人間の身体と精神とは緊密な関係を持ち、両者を明瞭に分けることが非常に難しい。ある心理状態に陥る時には常に特定の身体状況の変化が伴い、緊張する時に汗が出たり、目眩がしたり、息切れがすることさえある。逆に、身体的な状況も心理的な変化を引き起こす可能性が高い。

B. 主語は人間でない

このタイプの名詞は人間を主語に取らない。その中には「味、音、匂い」など従来五感（視覚、味覚、聴覚、嗅覚、触覚）と呼ばれるものと「雨漏り、人群れ、人だかり」などがある。本稿は B タイプに入る名詞を「五感現象」と「自然現象」という二種類に分ける。五感現象に入るのは、耳や口、鼻など特定の器官で感じ取るものである。例えば、味覚を表すものは「舌」だけで感知でき、「匂い、香り」のような嗅

¹² 人間を主語に取る「彼は {体臭／嫌な匂い} がする」は言えるが、このような場合「彼」は経験者ではなく、むしろ感覚の対象であり、その対象のある側面について描写しているため、「私は変な予感がする」のような文とは違う。

覚現象は「鼻」だけで感じ取る。

- (26) a. よく {食べて/*嗅いで/*聞いて} みたら、いい味がする。
- b. よく {*食べて/嗅いで/*聞いて} みたら、いい匂いがする。
- c. よく {*食べて/*嗅いで/聞いて} みたら、ささやかな音がする。

(作例)

(26)からわかるように、「味、匂い、音」などはいずれもある特定の器官で感知できるものである。ただ、視覚というのは味覚・嗅覚・聴覚などと比べてかなり特殊である。視覚の範囲は非常に広い、極端に言えば、目で見える全てのもの・現象は視覚の範囲に入れる。そのため、本稿でいう五感現象に「目で感じ取る」ものが入らないように設定する。

「味、音」などと比較すれば、「雨漏り、水漏れ、人だかり」などはある特定の器官で感じ取るのではなく、視覚・聴覚など多くの側面で感知できる現象である。例えば、「雨漏り、水漏れ」などは、目で感知するほうが多いが、耳でも感知することが可能である

- (27) a. (その様子を指しながら) あっ！あそこ！あそこに雨漏りがするよ！
- b. 静かに床に就いていたら雨漏りの音が聞こえてきた。
- (28) a. 遠くで稲光が見えた。
- b. 稲光とともに雷鳴が聞こえた。
- (29) 遠くの方に、何やら人だかりが見えます。 (全て作例)

「雨漏り、水漏れ、稲光」などは視覚的に捉える現象とともに、音も伴うため、目と耳で感知できる。「色落ち」は普通の場合音を伴わず、目だけで感知・認識する。「山鳴り」は視覚的な現象と音以外、微少な振動を伴う場合もあり、目と耳、体で感知することが多い。このように、自然現象は視覚・聴覚・触覚の総合である点で五感と区別する。「人だかり、人群れ、先細り、使い減り、持ち重り」などは厳密にいうと「雨漏り、稲光」のような典型的な自然現象とは少し異なり、人間の活動と深く関わっている。ここでは便宜上合わせて自然現象と呼ぶことにする。

以上をまとめると、表2のようになる。

表2 語彙的意味による四分類

	主語	特徴	語例
心理現象	人間	精神的な状況、身体的な現象を伴う事が多い	胸騒ぎ、気疲れ、直感、気、感じ、思い、気持ち、予感、心持ち、拍子抜け、感覚、印象、意識、気配、気分、気後れ、イメージ、心地、気落ち、実感、錯覚、心変わり、張り合い抜け
生理現象	人間	身体的な状況、限度を超えると病気に関連	寒気、吐き気、頭痛、めまい、悪寒、息切れ、鈍痛、胃もたれ、武者震い、身震い、立ちくらみ、耳鳴り、尿意、胸焼け、激痛、嘔吐、微熱、肩こり、腹痛、動悸
五感現象	人間でない	耳、鼻、舌など特定の器官で感知・認識	味、風味、酸味、物音、音、声、話し声、笑い声、人声、鳴声、ざわめき、発射音、足音、悲鳴、叫び声、響き、地響き、鼓音、水音、歓声、爆音、爆発音、奇声、異音、水音、怒鳴、騒音、羽音、雑音、雨音、射撃音、呻き声、つば音、捻り音、怒号、作動音、歌声、靴音、銃声、嘶き、破裂音、大音響、香り、匂い、異臭、悪臭、酸臭、銅臭、口臭、死臭、腐臭、体臭、ネキ臭、冷凍臭、刺激臭、腐敗臭、手触り、舌触り、山鳴り、雷鳴、底冷え、持ち重り、見劣り、見栄えなど
自然現象	人間でない	目とともに、耳や鼻など総合的に感知・認識	雨漏り、稲光、水漏れ、色落ち、地崩れ、人群れ、先細り、使い減り、人だかりなど

広義でいえば、人間の五感、思考、感情などは全て人間の知覚・感覚に属し、従来の研究でも知覚・感覚・感情動詞という大分類がある。本論文では五感感覚、人間の生理的な現象と心理的な現象を細かく分けるのは、表2からわかるように、各類に入る名詞には構造的の面でも意味の面でも微妙に異なっているからである。長島（2015）によれば、知覚には三種類があり、本稿の分類とほぼ一致している。

身体や物に原因する知覚は、以下の三種に分かれる。まず、我々の感覚を刺激する外部の事物が関係する外部知覚。第二に身体に関係する知覚として、飢え、渴きなどをはじめとする欲求の知覚や苦痛、熱など身体に関わる知覚。第

三として、私達の心に関係する知覚がある。私達の心のうちに結果が感じられ、普通その直接的原因が知られない知覚である。「よろこび」、「愛」、「悲しみ」、「憎しみ」などの感情です。身体や物に原因する知覚の中で、第三の知覚、つまり、心に関係する知覚が情念、つまり感情と呼ばれるものになる。

(長島 2015 : 3)

6. おわりに

本稿は先行研究を踏まえ、「～がする」構文に入る名詞について概観した。BCCWJで調べたところ、「～がする」構文に入る名詞には単純語と複合名詞、動作性の面で見れば、純粹名詞と動作性名詞がある。第4節では特に「～がする」構文に入る複合名詞について考察し、その中で、右側名詞型複合語はほとんど「～声／音」のような聴覚を表すものである。右側動詞型複合語には人間の心理的・生理的状況を表すものや自然現象、ものの性質・状態を表すものが多い。語の語彙的意味がアスペクト性質に関わっているため、第5節ではいくつかの基準を立てて「～がする」構文に入る名詞を自然現象、五感現象、生理現象と心理現象に分けた。今後は各類の名詞と「～がする」との結びつきについて詳しく考察を行う。

参考文献

- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』, 研究社.
- 奥津敬一郎 (1975) 「複合名詞の生成文法」『国語学 (101)』, 国語学会 pp.48-33.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』, ひつじ書房.
- 久保田一充 (2014) 『日本語の出来事名詞とその構文』, 名古屋大学大学院博士論文.
- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』, ひつじ研究叢書 言語編第31巻.
- 杉岡洋子 (2018) 「複合名詞の事象解釈をめぐる考察」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要 (49)』, 慶応義塾大学言語文化研究所, pp.45-62.
- 平尾得子 (1990) 「サ変動詞をめぐる」『待兼山論叢 24(日本学)』, 大阪大学大学院文学研究科, pp.57-73.
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』, ひつじ書房.
- 由本陽子 (2015a) 「日本語の動詞連用形を主要部とする動名詞の複合について」『言語文化共同研究プロジェクト (2014)』, 大阪大学大学院言語文化研究科, pp.89-98.

由本陽子（2015b）『『名詞＋動詞』複合語の統語範疇と意味的カテゴリー』，益岡隆志（編）『日本語研究とその可能性』，pp.80-105，開拓社。

由本陽子（2016）「日本語複合名詞の意味解釈メカニズム」『言語文化共同研究プロジェクト（2015）』，大阪大学大学院言語文化研究科，pp.79-88。

由本陽子（2017）「部分名詞を非主要部とする複合語から見た動詞由来複合名詞の叙述性再考」『言語文化共同研究プロジェクト（2016）』，大阪大学大学院言語文化研究科，pp.87-96。

Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*. Cambridge, Mass. MIT Press.

Miyagawa, Shigeru (1989) Light Verbs and the Ergative Hypothesis, *Linguistic Inquiry* 20: 659-668.

Uchida, Yoshiko and Mineharu Nakayama (1993) Japanese Verbal Noun Constructions, *Linguistics* 31: 623-666.

辞典類：

『大辞林』第三版，松村明（編），三省堂。

『日本語学キーワード事典』，小池清治・小林賢次・細川英雄・犬飼隆（編），1997，朝倉書店。

ネット資料：

長島知正（2015）「第10回 五感の見直しと『共感』，『感性、物づくり、物語—共感の世界の広がり』と繋がりを考える—（全12回）」東海大学出版部，pp.1-6。

<https://www.press.tokai.ac.jp/webtokai/>（2020年9月9日最終確認）

用例出典：

国立国語研究所（2020）『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Ver. 2020.03）

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>（2020年10月11日最終確認）

フ ムキク／人文社会科学研究所
（2020年9月10日受理）